

金子光晴全集



第六卷

第六卷 自伝Ⅰ マレー蘭印紀行 詩
人 新雑事秘辛



金子光晴全集



第六卷

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

金子光晴全集 第六卷 著者金子光晴 装幀者司修 発行者高
梨茂 印刷者山田博 発行所東京都中央区京橋二丁目一 中央公
論社 電話(五六二)五九二一 振替東京二一三四 ©一九七六
昭和五十一年三月十日印刷
昭和五十一年三月二十日発行



自伝

I

目次

マレー蘭印紀行	9
センブロン河	11
センブロン河	11
ねこどりの眼	14
雷気	17
夜	21
開墾	24
バトパハ	30
貨幣と時計	30
カユ・アビアビ	33
霧のブアサ	39

珊瑚島	蝙蝠	爪哇へ	爪哇	新世界	タンジヨン・カトン	シンガポール	コーランブルの一夜	コーランブル	鉄	スリメダン	ペンゲラン	ペンゲラン	虹	鳶と烏
81	78	74	74	71	69	69	64	64	56	56	48	48	45	42

スマトラ

スマトラ島

跋

詩人

第一部 洞窟に生み落されて

洞窟に生み落されて

第一の「血のさわぎ」

日本の脂と西洋の香気

漢学から文学へ

もう一つの導火線

ドリアン・グレイとサーニン

「明治」という荒地の中で

第二部 「水の流浪」の終り

デモクラシー思想の洗礼

最初の洋行

処女詩集の頃

大正期の詩人たち

「水の流浪」の終り

第三部 棲みどころのない酋長国

日本を追われて

再びバリで

戦争のとどろき

棲みどころのない酋長国

子供への召集令状

第四部 解体と空白の時代——戦後

新しい解体と空白

寂しさ

再びふりだしから出発

あとがき

新雑事秘辛

解題

中国の古代思想について

話術さまざま

詩と詩人について

敗戦前後

吉原・十二階下・娘子軍

魚などのはなし

詩の言葉・詩への態度

『愛情69』語彙注ほか

宗教の周辺

梅雨の晴れ間に

若年と老年と詩と

女性考

『鮫』のまわりのこと

文筆以外にたずさわった仕事

後記

352

337 328

マレー蘭印紀行

センブロン河

センブロン河

川は、森林の脚をくぐって流れる。……泥と、水底で朽ちた木の葉の灰汁をふくんで粘土色にふくらんだ水が、氣のかぬくらいしずかにうごいている。

ニッパ——水生の椰子——の葉を枯らして屋根に葺いたカ
ンボン（部落）が、その水の上にたくさん杭を涵して、ひ
よろついている。板橋を架けたして、川のなかまでのり出
しているのは、舟つき場の亭か、廁か。廁の床下へ、綱のつ
いたバケツがするすると下ってゆき、川水を汲みあげる。水
浴をつかっているらしい。底がぬけたようにその水が、川水
のおもてにこぼれる。時には、糞尿がきらめいて落ちる。

杭には、まる木舟が繋がれ、椰子の実や鯰籠を市へ出す積
荷の舟の足がかりとなる。集散地バトバハから、裳の布地、

装身具、石鹼や懷中電燈、ゴム園の旦那たちに入用な味噌醬
油、日本酒、麦酒などの上荷の舟も、千本杭に横づけになる。

部落は、川水に身を乗り出し、旅のことや娘たちのこと、
夜遊びやどんげん踊のこと、新柄の裳のこと等をおもいふけ
っている男にも似、両ひじを立て頬杖突いて、うっとりとは
るかを眺めやる。その部落を川上へ遡れば、バレラハである。
ジョラである。トンカン・ベチャである。ビルンである。パ
ン Chol である。大和ゴム園の所在ヤマト、パンヤニ、スリ
ガデン、左へのぼれば盛時バトバハをしのいでいたと云うヨ
ンピンに通じ、右は三五公司ゴム第一園のあるセンブロンを
経てアエル・イタムにのぼるその三つ叉に、スンガイ・ライ
ヤの旧ジョール護謨園がある。守田、亀川、今沢、鈴木、
末藤、奥根、ジョラの原口園……センブロン河に沿うて大小
のゴム園が散在している。それらゴム園をめぐる、馬來人、
支那人、印度苦力たちが小舎をつくっている。ニエーカー、
三エーカーの土人園の数は、さらに小さな墨痕飛沫をなして
ちらばる。

隣近所のない水辺の森を切りひらいて、支那人のサゴひき
小舎が立っている。

泉源桑梓木本地。

協興異域旅僑居。

一聯兩行の紅唐紙の字が、小舎の入口の柱に、雨露にさら

されたまゝ貼つてある。

支那人たちは、水亭の部落で米粉を油炒りし、日用雜貨を
あきない、珈琲店をひらき、白いぶかぶかしたももひきのな
かへ、馬來の小錢を悉く皆おとし込む。彼らは、はるばる広
州から、または福州から、瀛州から、この密林のおくまで金
錢を搾出しにきた。彼らは、裸で稼ぎ、彼らはすべての慾望
をおさえ、貯える。彼らは、どこ土地にも順応し、彼らの
新故郷をつくり、もし彼らに足の踵の皮を与うれば、広州大
羹をそれで作ることだってできる。華僑——国外に僑居す
る中華人——は、森から、六つ球の算盤で弾き出す。馬來人
たちが猶、この森のふるい夢や、昔語りにうっとりとして、
見ほれ、きゝほれているひまに。

森かげの川のながれは、みどりを冠つて、まだ熟れぬピー
サン・イジョウウ（青いばなな）のごとく若い。

わが便乗する遡江船が、機関のひびきを餌させて、あたらしい
象牙紙で水を切るように、ふなべりを川上に進める。水
は、あおりをうけ、兩岸のねじくれたマングローブのあいだ
や、アダン類をひたした灌木のなかで、猪口をかえすような
波を立てる。枝から枝へ、翡翠が翔ぶ。ものの気配をさとい
つて大蜥蜴の子が、木の根角から、ばさりと水に墜ちる。

下流の感情は低く、落魄であり、上流のなさはこまやか

で、妖女の化粧よりもきれいだである。たやすく人の眼にふれ
ることを怖れて、いたずらに明眸咬齒の女のような、きよら
かなかなしみに身を澄ませて。

バトバハを出発してバレラハにいたるまでは、兩岸はみわ
たすばかり闊け、ニッパ椰子が、巨きな權をおし立ててなら
ぶ。それよりほかにない風景である。

十一月、雨季満水のころには、ニッパは水のおもてに、ベ
ン先ぐらいの細葉の突先を立てる。だが、乾季には、恥しい
ところまでも剥ぎとられ、根まで乾れあがり、ひび入った鉛
色の泥中にのめずり込んだり、倒れたり……大魚の胴骸に似
て半ばそのなかに埋まったりして。ふといやつ根元は肥え
ふくれて、青磁の花瓶を抱くようだ。その鋭い葉が、穂先
をそろえて二丈あまりも高く天を指さす。とんがりの先にさ
わって、空がびくびく痛がっている。葉先がかすかにばらば
らと言いだしてみたり、あるいは、並んでいる葉のあいだへ、
光線の面と、角度とを異にした他の葉の列が影をうつし、重
なりあい、また、弾きあうように互にゆずり合う。空は、軍
艦の腹のように灼けて、燻ぶってそばへ寄りつくこともでき
ないくらい、暑苦しい曇天であった。

その空のしたで、植物どもは、一属、一群かたまつて互に
進撃し、乗越え、蔓延っていた。マングローブの枝を垂らし
ている近辺には、蘆竹の姿はなかったし、ニッパ椰子の領域

にはまだ、「猿喰わず」のたぐいは繁りあつていなかった。

油虫のからだのようになめっこいオイル椰子、精悍で、くろくろとしたサゴ椰子のむらがるあたりに村落があり、二つ、三つの木の風見がくるくると廻っている。えび色の亜鉛屋根でアラビア風の円屋根を真似た回教礼拝堂が、ゴムの木のあいだにみえかくれする。

さかのぼりゆくに從って、水は腥さをあたりに発散する。

森の樹木のさかんな精力は、私の肺や、そのほかの内臓のふかいすみずみまで、ひやつこい、青い辛味になって、あおりこまれる。

アエル・イタム——馬來語で黒い水という意味で、上流の水が灰汁のために黒くなっているところから名称けられた地名である——までさかのぼってみれば、森はまだ、太古のまゝで、野獣どものたまらない臭さをはこんで彷徨っている。疥癬で赤裸になった野猪、虎、眼ばかり光る黒豹、鰐や川蛇

……、針鼠、うそぶくコブラ、梢をぬつてとぶ飛蜥蜴、鶏のみにカンポンを襲う巨蟒、一步、森のはずれに歩を踏み入れるならば、そこには、怖るべき黒水病の媒介者の悪性なマリア蚊「アナフレス」が棲息しているのである。

気まぐれものは、驟雨である。

うつり気で、ながつゞきしない熱情に似た豪雨が、一気に

ゆきすぎてしまふと、カンポンの杭のあいだの泥水の跳梁のなかに、太陽がぐりぐり揉みこまれ、光の屑や、どぎつい破片が、泥水のうえにちらばる。

——アイやあ。

苦力どもが大声をあげて叫び、その水の底から太い綱を、四五人がかりで曳いている。

すぐそばに、銃をかまえ、水面をねらうヘルメット帽の旦那が、轟然一発ぶつ放す。苦力たちは猶、掛声をそろえて怪物を水面から岸の草っ原にひきずりあげる。灰色をした大鼈で、そのまわりは一メートル半もある。

鉛の湯を浴びたように遠い椰子林が、まっ白になってみえる一方から、五寸ばかりの短かい缸がたつて、そのあまりは雷雨を釣つてうごく暗雲の金の筐縁にかくされている。

センブロン河の兩岸の森は、世界の嵐など、すこしもしらず眠っている。ゴムは、何万エーカーの森林を征服したが、森の住民や、苦力どもは、ようやく生活の苦惨にあえぎはじめたが、森は、なお、身うごき一つしようにとはせぬ。

そして、川は放縦な森のまんなかを貫いて緩慢に流れている。水は、まだ原始の奥からこぼれ出しているのである。それは、濁っている。しかし、それは機械油でもない。ベンジンでもない。洗料でもない。礦毒でもない。

それは、森の尿である。

水は、歎いてもいない。挽歌を唄ってもいない。それは、ふかい森のおごそかなゆるぎなき秩序でながれうごいているのだ。

(註) 一、南洋土人男女共腰に巻く。

二、馬來土人の踊、指先の韻律巧みである。

三、サゴは幹全部に澱粉がつまっているので、土人はこれを食料とする。

四、バナナの種類、青バナナは普通のもの。

五、三五公司のモーター船。

六、キニーネ中毒により発熱し、尿に血をまじえて往々死に至る。

ねこどりの眼

センプロンの三五公司ゴム栽培第一園の日本人クラブに着いた。

雨季のころおいのことで、晴れ間もみせずえびえとしたゴムの木の沈黙が、クラブのまわりを領したまゝ、その日はくれていつて了った。バンガローのテラスの藤椅子に靠れて話をしていると、家のうちまでつめたい霧がながれこんでできた。そのたびに、焰が洋燈のほやのなかで腰を伺め、大きくひらいて、いっぱいに匍った。日本から来た客ときいて、新しいうき世ばなしをきくためにあつまってきた山の人たちは、とりとめない話を黙々としてきいて、夜ふけるまでいて、そ

れぞれの宿舍へかえっていった。床には、白蟻の喰った木屑がこぼれていて、菓子屑のように足のうらにさらさらとふれた。

——ひどい白蟻ですよ。テニスコートにステッキを忘れて、翌朝行ってみると、一晩で亭敷のようにかるくなっているんですよ。このクラブの建物だっていつ崩れてくるか。

語りつつ彼等の一人が、柱をコツコツと叩いてあるくと、どの柱も、むなしいころろのような音で答えた。

彼等がいつてしまってから、クラブの支那人ボーイが、私のベットをつくってくれた。枕元に、豆ランプを点し、裾の方に蚊遣りを焚いた。浴衣一枚では肌寒いほどであった。ねむりつくまで、もの読む習慣なので私は室のすみにある書棚を物色した。そして、一冊をぬきとったが、みると忌わしや表紙も、本文も、どろどろにくずれて、頼のようだ。となりに竝んでいる本をぬきとる。それもおなじだ。隣も、背だけはこともなげに揃っていないがら、かさねたまゝ、そっくり縦に貫いて噛みくずした——それも、白蟻の所業であった。

激しい降雨の音をきいて眼をさましたのは、どうやら真夜なかであった。意識が次第にはっきりしてゆくに從って、よりやくそとの凄まじい豪雨であることに気付いた。

テラスに出て打ちながめると、眼前のアタップ葺の先をつ